

地域の中で誰もが自分らしく

生活していくための支援

～ケアリングコミュニティをめざして～

根本里咲 磯前遥香 深谷奈津希

1. はじめに

私たちは、特別養護老人ホーム、社会福祉協議会、急性期病院で社会福祉援助技術現場実習Ⅰ(以下、実習とする)を行い、実習で体験したことを共有し合った。私たちの実習先は、それぞれ異なる領域であるが、体験を共有していく中で、支援者は利用者の主体性の尊重をし、自分らしい生活につなげることが大切だと気づいた体験が共通して挙がった。さらに、話し合いを進めていく中で、自分らしい生活を支援するためには、地域の社会資源の活用が求められると考えた。しかし、実習担当教員との面談において、自分たちの体験を話したところ、「地域の中で自分らしく生活するのは施設にいる利用者のことだけを指しているの」と尋ねられた。そこで私たちは自身の体験を改めて振り返った。私たちは、施設外の住民が施設利用者に関わることで、住民が利用者から学んだり、考えたりする機会となっているということに気がついた。したがって、施設の利用者だけを支援するのではなく、施設の利用者を含む住民同士の双方向性に目を向けた地域づくりを支援することが、地域の中で誰もが自分らしく生活していくために重要であると考えた。

そこで私たちは、地域福祉について学ぶために文献を探したところ、地域福祉の基盤づくりには、ケアリングコミュニティを目指すことが基本であると学んだ。ケアリングコミュニティは、当事者性、地域自立生活支援、参加・協働、ケア制度・政策、地域経営といった5つの要素により構成されている。その中でも、当事者性を中核としたケアリングコミュニティの構築に焦点を当てて研究し、学びを深めたいと考えた。

2. 研究方法

- (1) 各々の体験したことを交換する
- (2) グループで、どこに焦点を当てるか話し合う

- (3) 参考文献・資料を収集する
- (4) グループで検討した焦点が妥当か確認する
- (5) 研究を展開する
- (6) 参考文献・資料を活用し、各々の体験と比較し、考察する
- (7) 実習の振り返りを行い、具体的な評価をする
- (8) 今後の実践課題について考え、心構えにつなげる

3. 先行研究

(1) ケアリングコミュニティの定義

【定義】

地域福祉の基盤づくりの目的であり、「共に生き、相互に支えあうことができる地域」のことを指す。

(引用・参考文献:岩間伸之・原田正樹『地域福祉援助をつかむ』有斐閣, 2012年, P139-P140)

(2) ケアリングコミュニティの構成要素

- ①当事者性……………ケアリングコミュニティを考えていく上で、中核となるもの。当事者とは、そこで暮らしを営む住民自身を指す。当事者が主体としての意識をもつことがケアリングコミュニティでは求められる。
- ②地域自立生活支援…行政などのフォーマルサービスだけでなく、近隣住民とのふれあいなどのインフォーマルサービスを活用したすべての人々が対象の地域包括ケアシステム。
- ③参加・協働……………地域福祉の基盤づくりをしていくためには、地域住民の参加が必要。制度によるサービスだけでは、その人らしさを支えていくには十分でない。また、誰もが安心して暮らしていける地域にするためには、地域住民の参加や理解が必要。
- ④ケア制度・政策……………ケアに関する政策・制度が地域でケアリングを推進していくために必要な、社会保障や生活関連の施策のことを指す。ソーシャルインクルージョンの考えを基に必要な制度やプログラムを推進したり、地域の中に存在している計画を機能させたりする。

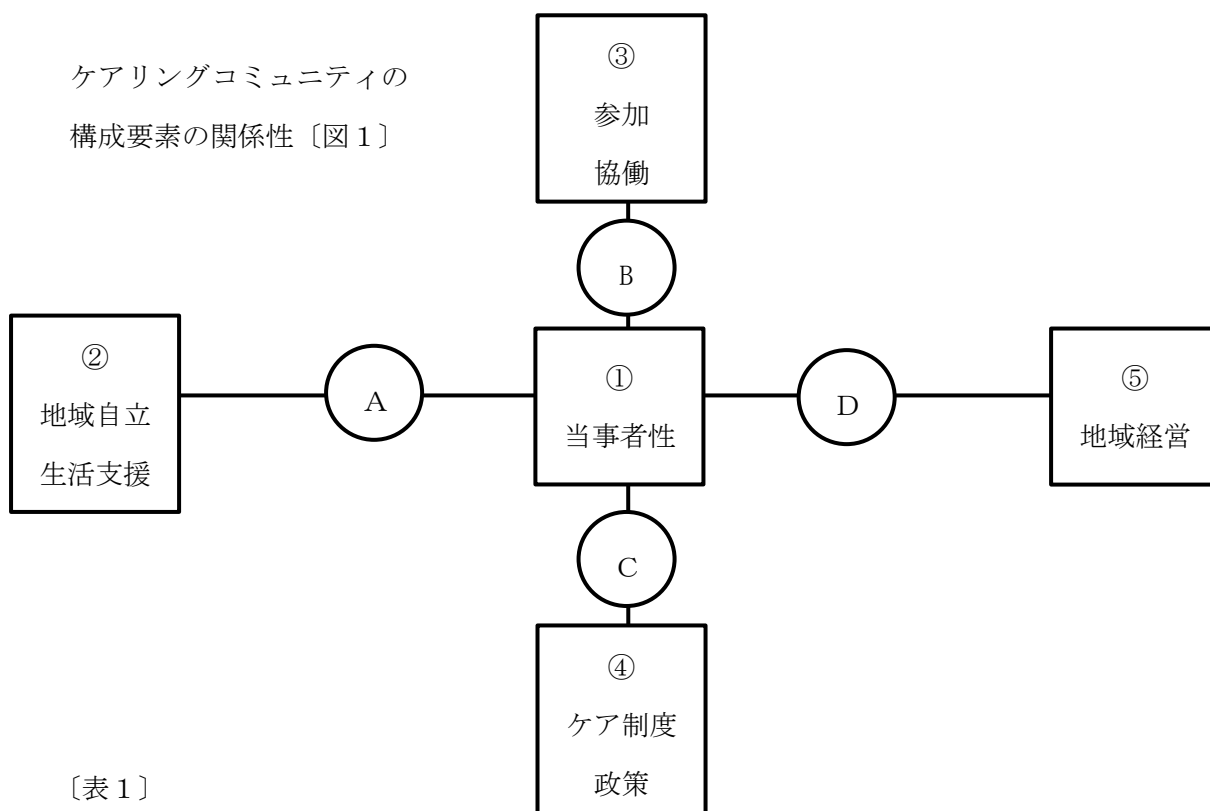
⑤地域経営……ケアリングコミュニティを推進していくためには必要な財源や人材などの社会資源の開発や新たなビジネスモデルを創り出すことが必要。

(引用・参考文献:岩間伸之・原田正樹『地域福祉援助をつかむ』有斐閣, 2012年, P139-P140)

4. 先行研究の考察

私たちは、上記したケアリングコミュニティの5つの構成要素の関係性を考えた。

ケアリングコミュニティの
構成要素の関係性〔図1〕



〔表1〕

A	当事者性がないまま、地域自立生活支援を行っても行政等では支えきれず、また、インフォーマルサービスの活用にもつながらない。当事者性があれば、インフォーマルサービスの創出・活用が可能になる。
B	当事者性がなければ参加にはつながらない。そして、協働にもつながらない。
C	当事者性がなければ、ソーシャルインクルージョンの考え方はうまれない。政策・制度をつくったとしても行政主体になってしまう。
D	当事者性を活かしたマネジメント・支援をしていくためのものである。

5. 仮事例

【設定】 A地区：高齢化が進んでいる。

地区の一面には若者世帯が増加しているが交流が少ない。

Bさん：一人暮らしの75歳女性。

軽度の認知症。

娘・息子がいるが県外在住で疎遠。

夫は5年前に他界。

話すことや人付き合いが好き。

最近仲のよいCさん（75歳、女性）が入院し、外出の機会が減少している。

ある日、Bさんの近隣に住むDさんから、“Bさんから回覧板が回ってこない”と民生委員のEさん（60歳、男性）に相談があった。そこで、EさんがBさんの様子を伺いに訪問したところ、Bさんの部屋の中はごみが散乱し、悪臭が漂っていた。Bさん宅の様子を見たEさんは、社会福祉協議会のFソーシャルワーカーに連絡をした。

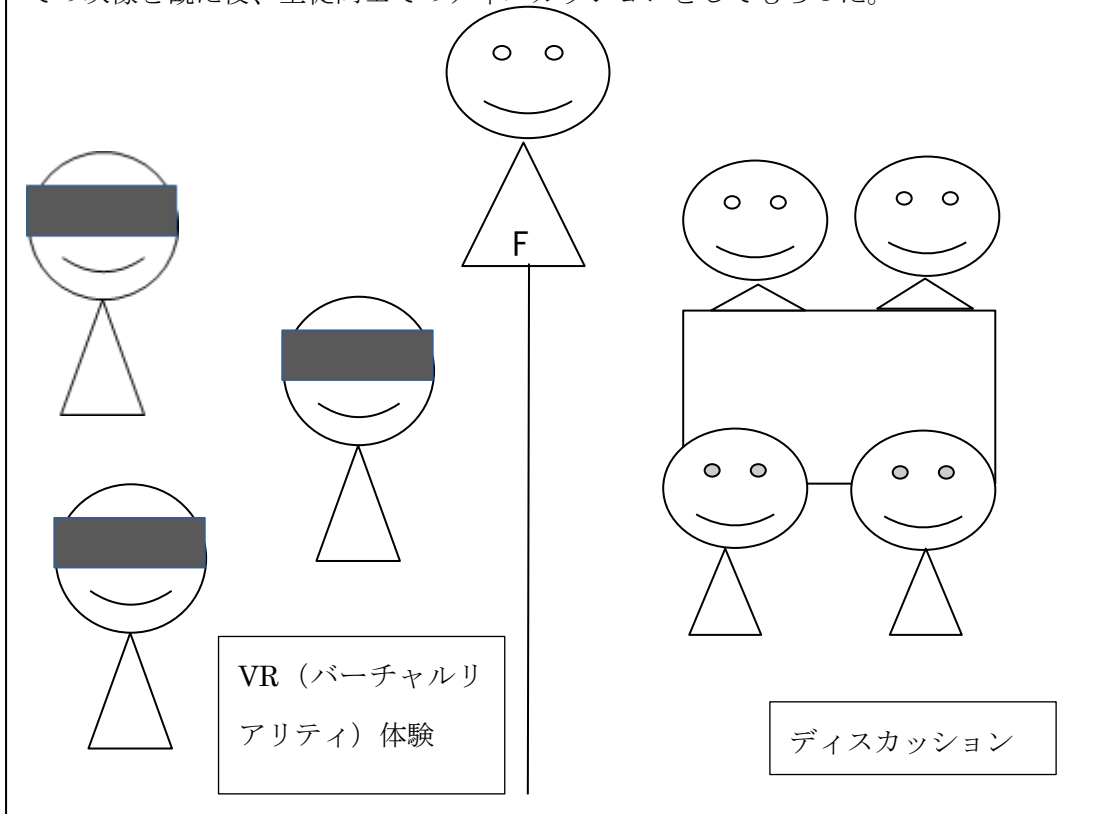
このことからFソーシャルワーカーは、A地区における独居高齢者が生活に困難を抱えている可能性があると考え、この事例について社会福祉協議会の中で検討会議を開いたところ、他の職員からも同じような事例がいくつか挙がった。

それにより、独居高齢者や認知症高齢者が周囲に気づかれないままに疾病等が悪化し、気がついたときには治療が困難であるという地域の状況がわかってきた。社会福祉協議会の職員だけで、独居高齢者の見守りを行ったり、現状を把握したりすることは、現実的に考えると非常に困難である。

そこで住民の力を活用しようと考えたFソーシャルワーカーは、民生委員Eの存在を思い出す。地縁は完全に切れているわけではない。地域住民の力で、このA地区をつくり上げていけるのではないかと考え、その解決のためにはケアリングコミュニティの構築が必要であると考えた。

【場面1】

Fソーシャルワーカーは、まず住民に高齢者について関心・理解を深めてもらうために、A地区で毎年開催されているお祭りにて認知症高齢者目線のVR体験を企画・実施した。また、小中学校・高校にて学校側と協議を重ね、高齢者の地域生活についての映像を観た後、生徒同士でのディスカッションをしてもらった。

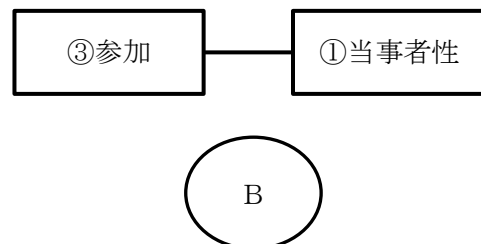


【場面1の考察】

実際に体験したり、話し合いを行ったりすることで、“認知症高齢者”が身近に感じられる存在となる。また、話し合いによって、他人事ではないという意識が少なからず芽生える。今後の協働につながる第一歩である。

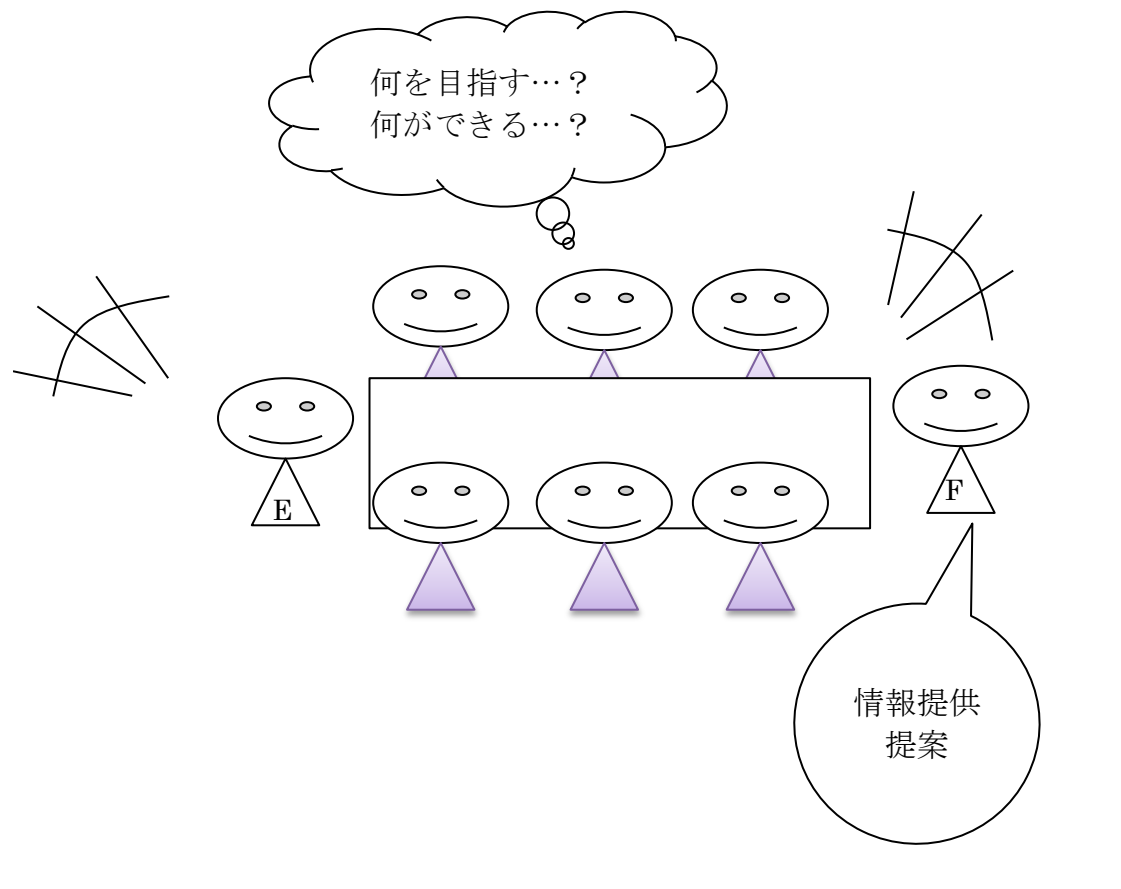
〔図2〕

- ・実際に体験して知る。⇒③参加(参加・協働)
- ・地域で暮らす高齢者の現状を知る。
⇒①当事者性



【場面2】

Fソーシャルワーカーは【場面1】での体験でうまれた住民の想いを活かし、A地区の地域住民同士の話し合いの場を提供することにした。話し合いが実施され、住民同士で地域の独居高齢者の現状に対し、地域として何をめ指すか、そのためには何ができるかなどを具体的に話し合った。Fソーシャルワーカー、E民生委員も参加し、情報の提供や提案を行った。



【場面2の考察】

当事者性を活かし、地域住民を地域における重要な人材として考え、地域の高齢者のために何ができるか話し合っている。新たな協議体（社会資源）をつくることもインフォーマルサービスの創出・活用である。

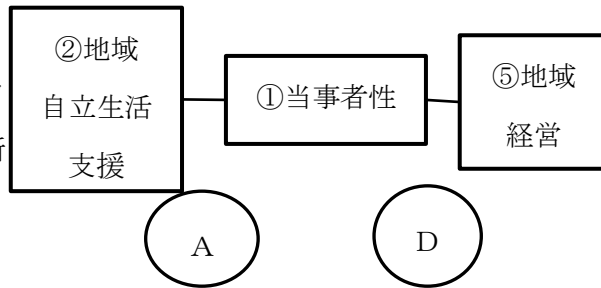
そして、その活動を支援（情報提供や必要に応じた場所や資源の提供）することもケアリングコミュニティをつくる上で、ソーシャルワーカーの責務である。

- ・住民が地域の高齢者のことを思い、住民同士で関わり合いはじめる。 [図3]

⇒②地域自立生活支援

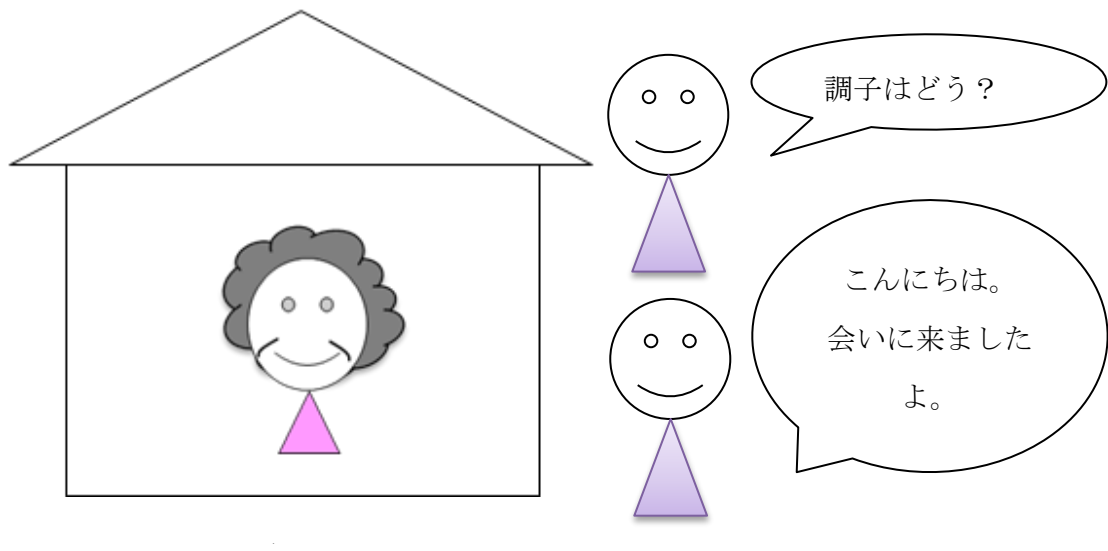
- ・話し合いに民生委員やソーシャルワーカーも参加することで、人材を活用し、新たな取り組みをつくりはじめる。

⇒⑤地域経営



【場面3】

話し合いの結果、具体的な取り組みとして、独居高齢者の見守りを住民で行うことにした。また、実際に見守りを開始し、現状や状態を報告しあう見守りの報告会も実施することにした。



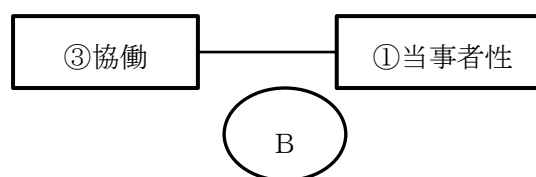
【場面3の考察】

話し合いを経た地域住民が協働し、高齢者の生活を支える活動をする。ソーシャルワーカーはこの際、住民の協働の支援を行う。(ex.同行)

[図4]

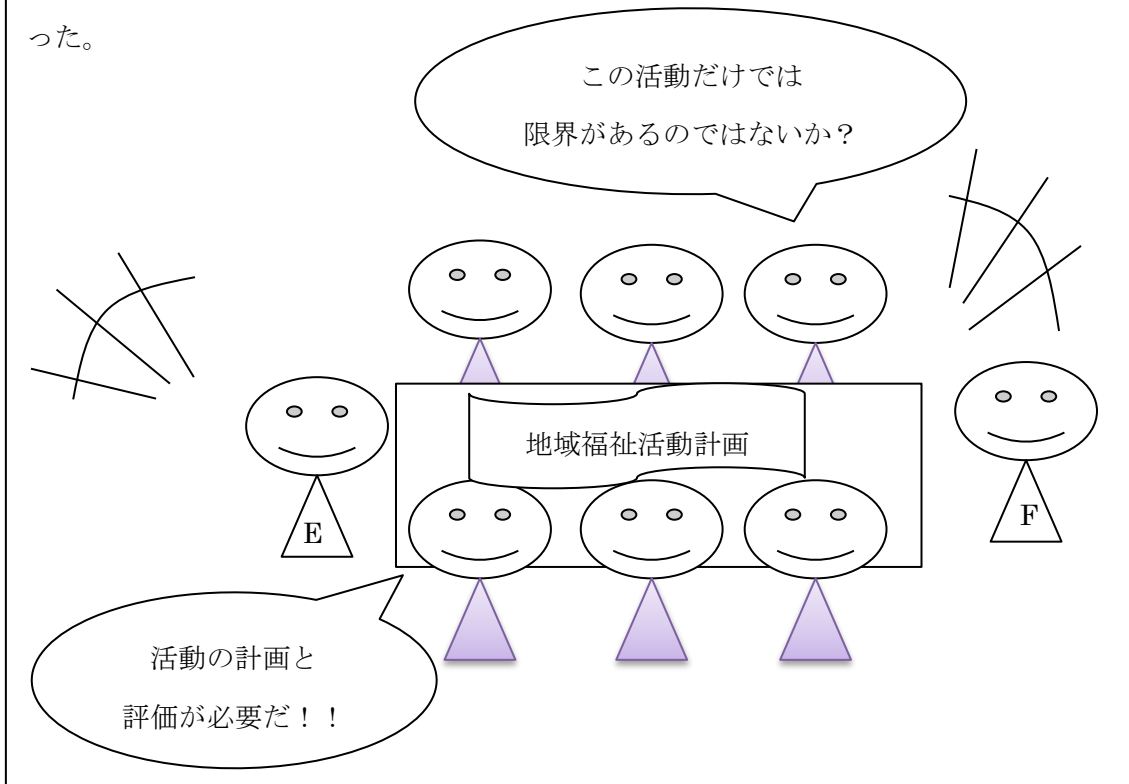
- ・地域住民同士が地域の課題を共有し、ともに力を合わせて活動を開始する。

⇒③協働(参加・協働)



【場面4】

見守りの報告会を行う中で、住民から「この活動だけでは限界があるのではないか」との意見があり、活動の計画と評価が必要であると報告会で決まった。そこで、もとよりA地区に存在していた地域福祉活動計画の活用と推進をしていくことにした。計画策定にあたって、住民と社会福祉協議会で話し合いを重ねる中で、活動を進めていくためには新たな取り組みが必要になり、さらには新たな人材や財源も必要になることがわかった。

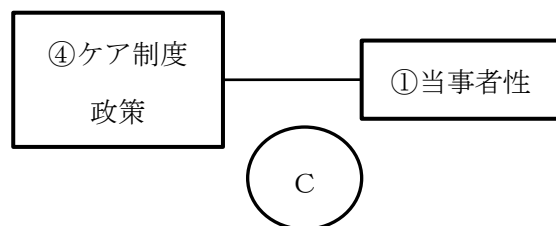


【場面4の考察】

【場面3】での活動を通して、住民同士で活動の報告会を行い、その話し合いの中で住民自身が、既存の活動だけでは限界があり、新たな取り組みや計画の立案、評価が必要であることに気づく。この気づきによって、地域の中に存在している計画を機能させることになり、ケアリングコミュニティに必要なプログラムを推進していくこととなる。

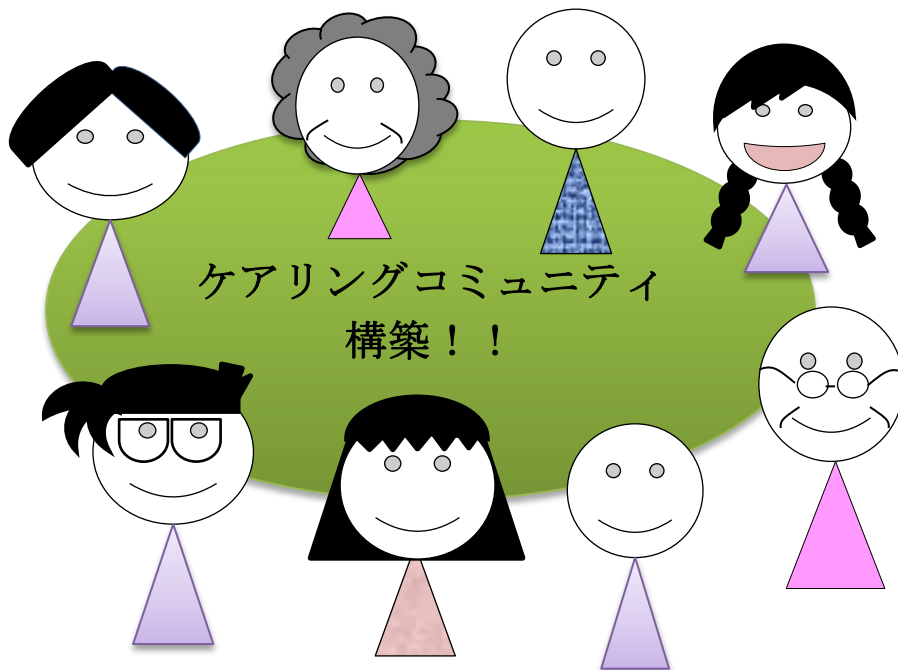
〔図5〕

- ・【場面3】を経て、計画立案や評価、新たな取り組みが必要であると住民が気づき、その気づきを活かし、プログラムを推進していくこと。 ⇒④ケア制度・政策



【場面5】

その後も住民同士の活動が活発になり、住民の主体性が向上した。その中で、この活動をきっかけとして新たな課題の発見や、地域住民同士の関わりができた。出発点は高齢者の生活を支えることであったが、結果として高齢者だけでなく、地域住民一人ひとりの生活を住民同士が支えあう、ケアリングコミュニティが構築された地域となった。



【場面5の考察】

その後、今回の活動をもとにソーシャルワーカーは住民との関わりをもちながら、さらなる発展へ向け、社会福祉協議会内や住民とのネットワークを形成・維持し、ケアリングコミュニティが構築されていった。

ケアリングコミュニティが構築されていくことによって、課題の早期発見や地域でその課題に取り組むことが可能となっていった。

6. 総合的な考察

この仮事例を通し私たちは、ケアリングコミュニティでは、住民が当事者として地域の多様な課題に取り組んでいく中で、新たな支えあいの輪が広がり、共に支え、支えられる存在となる双方向の関係性が築かれると考えた。

本研究では、先行研究に従い、当事者性を中核として仮事例を検討した。当事者性を中核とすることによって、他の構成要素である②地域自立生活支援、③参加・協働、④ケア制度・政策、⑤地域経営の実施にあたり、住民が当事者として実際に活動等に参加することにつながった。さらに、そういった当事者性を中核としたそれぞれの活動が、より当事者性を高めているということに気がついた。

当事者性を中核としたケアリングコミュニティの構築のためには、ソーシャルワーカーの側面的支援が必要不可欠であると考えます。なぜなら、住民が地域の課題に自然に気がついたり、最初から住民だけで活動を展開したりしていくことは困難であると考えます。そこで、ケアリングコミュニティを構築するにあたってのソーシャルワーカーの役割は、大きく4つあると考えます。

まず1つ目として、地域住民との関係性の構築がある。今回挙げた仮事例では、民生委員からの連絡が地域の課題を発見するきっかけとなったが、これは、ソーシャルワーカーと民生委員との関係が構築されていたためである。そのため、ソーシャルワーカーは地域へ足を運び、住民と関係を築くことが求められる。2つ目は、課題の発見である。地域にある課題を個人のもつ課題ではなく、地域の課題として捉えるために、ソーシャルワーカーは事例の検討会議などによる地域の状況把握をすることが求められると考えます。3つ目は、住民が課題に気がつくための取り組みであると考えます。住民が普段の生活の中で、地域の課題を知ることは難しい。そのため、ソーシャルワーカーは住民が地域の課題に気がつく機会を提供する必要がある。4つ目は、住民が課題に取り組んでいく際の情報提供や企画の提案であると考えます。住民が課題に取り組む上で、福祉制度や具体的な取り組みの事例などの知識が必要になった際、住民だけで考えていくことは困難である。そのため、ソーシャルワーカーが住民の取り組みを支えていくことが必要である。

そして、これらの役割を果たしていく中でソーシャルワーカーは、常に“当事者性”を意識し、継続的に側面的支援をしていくことが重要である。

将来私たちがソーシャルワーカーとして現場で働く際には、今回の研究を活かし、利用者や住民を地域の当事者として捉え、それぞれがもつ支えあいの力を信じて支援することができるソーシャルワーカーになりたいと考える。

7. おわりに

私たちのグループは、それぞれ実習先の領域が異なり、実習での体験になかなか共通点が見つかりませんでした。そのため、研究のテーマが定まらず、何度も話し合いを繰り返しました。テーマが決定してからも、参考とする文献やモデルが少なく研究をすすめる中で行き詰まるが多かったため、私たちが何を研究したいのかわからなくなっていました。

しかし、実習担当教員からの助言を受け、私たちはもう一度話し合ったことで、住民がともに支えあうケアリングコミュニティについて学びたいのだと改めて気がつくことができました。その後の研究を進めることも簡単ではありませんでしたが、グループメンバー3人で夜遅くまで集まり、意見を出し合い切磋琢磨したことで、納得のいく研究をすることができました。

私たちが何度も迷いつまづきながらも、こうして研究をすすめ、今日無事に報告会を迎えることができましたのは、たくさんの方々のご協力・ご指導・ご支援のおかげです。実習を受け入れてくださった実習担当職員をはじめとする実習先職員の皆様、そして利用者の皆様、患者の皆様、そのご家族の方々、地域住民の方々には温かく迎え入れてくださり嬉しく思うとともに、感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。そして、熱心にご指導してくださった実習担当教員の方々や、連絡調整や時には優しく声をかけてくださった実習担当助手の方、いつもアドバイスや温かい言葉をかけてくださった先輩方の存在は私たちにとって、とても心強かったです。本当にありがとうございました。また、報告会のために一生懸命準備をしてくれた後輩たち、いつも支えてくれた家族、本当に感謝しています。

最後に、一年間どんな時も一緒にいた実習生のみんな。私たちは、壁にぶつかっても、どんなに辛くても、みんなで声を掛け合い、励ましあい、いつも笑顔が絶えませんでした。そんなみんなと一緒に頑張ってきたからこそ、どんなことも乗り越えることができました。私たちにとって、みんなの存在はとても大きく、支えになっていました。このメンバーだったからこそ、ここまで来ることができたのだと思います。本当にありがとう。そして、これからもよろしくお願ひします。

8. 参考文献

・岩間伸之・原田正樹『地域福祉援助をつかむ』有斐閣，2012年